

ジェイムス夫人とちりめん本 *The Flowers of Remembrance and Forgetfulness*

——『今昔物語集』『兄弟二人殖萱草紫苑語』の翻案——

大塚 奈奈 絵

1. はじめに

江戸が東京に変わり、小学校教科書の文部大臣検定が規定された 1885（明治 18）年、欧米の書籍や文具等を輸入するかたわら教育書などの出版業を営んでいた長谷川武次郎（1853-1938）の弘文社が、木版挿絵の入った欧文の「日本昔噺シリーズ」を出版した。これらは、和紙に本文の欧文が活版活字または木版で印刷され、著名な絵師による木版の挿絵が添えられていた。「学校教科書用彩色無し」のものと「彩色絵入り」のものに加え、後には、縮緬（ちりめん）紙を使用した「ちりめん本」が海外で人気を呼び、他の出版社からも様々なちりめん本が作製され、輸出された。現在では、これらの木版彩色刷り、彩色なしの白黒のもの、平紙本や縮緬紙によるものを総称して「ちりめん本」と呼んでいる。

長谷川武次郎が出版した「日本昔噺シリーズ」には、当初から英語版・ドイツ語版・フランス語版があり、最終的には 10 カ国語で出版されたが、特に、英語版は、イギリスで最も歴史のある児童書の出版社であるロンドンのグリフィス・フェアラン社（Griffith, Farran & Co. London）によりロンドンとシドニーで販売されたことが知られ、児童書として高く評価されている。「日本昔噺シリーズ」の訳者の多くは、明治政府が先進国の知識や技術や学ぶために雇用した「お雇外国人」だったが、唯一の例外が女性の英訳者であるジェイムス夫人（Mrs. T. H. James, または Kate James (1845-1928)）である。『松山鏡』を初めとする「日本昔噺シリーズ」のうちの 14 編を英訳し、ハーン（Lafcadio Hearn（小泉八雲）(1850-1904)）に絶賛されたジェイムズ夫人については、これまで詳しい紹介がなされていない。ここでは、夫人の長女で児童文学作家であったグレイス・ジェイムス（Grace James (1882-1965)）の著作に基づき、ジェイムス夫人の日本での生活を紹介するとともに、これまでジェイムス夫人のオリジナル作品であるとされてきた *The Flowers of Remembrance and Forgetfulness* の原典について考察する。

2. 英語版「日本昔噺シリーズ」とジェイムス夫人

長谷川武次郎によるちりめん本「日本昔噺」シリーズは、前述したように最終的には 10 カ国語で刊行されたが、その中で冊数が最も多いのが英語版である。（表 1）最初に刊行された「日本昔噺シリーズ」は No. 1~20 であったが、このうち No. 16 *The Wooden Bowl*（鉢かづき）は 9 年後に *The Wonderful Tea-Kettle*（分福茶釜）に差し替えられたので、全部で 20 編 21 冊となる。その後 No. 21~25 の続「日本昔噺シリーズ」がやや大判で出版され、さらに「日本昔噺セカンドシリーズ」の No. 1~3 が出版された。続「日本昔噺シリーズ」の No. 23~25 はハーンによるもので、後にハーンによる他の 2 冊と合わせた 5 冊が 1 セットとして出版された。したがって、英語版の日本昔噺シリーズは合計 30 冊が出版

されたことになる。この 30 冊の内の 14 冊を訳したのがジェイムス夫人であった。

表 1：石澤小枝子『ちりめん本のすべて』による英語版日本昔噺シリーズの一覧
(下線はジェイムス夫人の作品)

〈日本昔噺〉	
1. 桃太郎	2. 舌切雀
3. 猿蟹合戦	4. 花咲爺
5. かちかちやま	6. 鼠の嫁入り
7. 瘤取	8. 浦島
9. 八頭ノ大蛇	10. 松山鏡
11. 因幡の白兎	12. 野干ノ手柄
13. 海月	14. 玉の井
15. 俵藤太	16. 文福茶釜
16. 鉢かづき	17. 竹篋太郎
18. 羅生門	19. 大江山
20. 養老の瀧	
〈続日本昔噺〉	
21. 三つの顔	22. 思い出草と忘れ草
23. 猫を描いた少年	24. 団子をなくしたおばあさん
25. ちんちん小袴	
〈2nd シリーズ〉	
1. 化け蜘蛛	2. 不思議の小槌
3. 壊れた像	
〈ハーンの 5 冊本〉	
猫を描いた少年 団子をなくしたおばあさん ちんちん小袴 若返りの泉 化け蜘蛛	

ジェイムス夫人の『松山鏡』については、ラフカディオ・ハーンが 1894 年 3 月 9 日付けのバジル・ホール・チェンバレン (Basil Hall Chamberlain (1850-1935))宛ての手紙の中で絶賛し、チェンバレンがそれに答えて、ジェイムス夫人が日本での古くからの友人の一人で、夫君は日本郵船の顧問である優秀な女性であると説明したことが知られている⁽¹⁾。

Koyama⁽²⁾によれば、ジェイムス夫人の結婚前の姓名は Kate Margaret Rankin, (Katherine M. Rankin, または Catherine M Rankin) で、1845 年スコットランドのアバディーンシャー、オールドデューアに生まれた。父のアーサー・ランキン (Arthur Ranken, 1806-1886) は牧師で英国国教会の首席司祭であり、著作もある博学な人物であった。家庭で教育を受けたケイトはトルコのコンスタンチノープル (現在のイスタンブール) で家庭教師をしていた時にケント出身の海軍士官であったトーマス・ジェームス (Thomas H. James (1850?-1910))に出会い、1870 年代のはじめに結婚して、夫トーマスの転勤により、1876 (明治 9) 年に東京に移住した。トーマスは、東京築地の海軍兵学校 (Japan's Naval Academy) で測量学や数学を教え、同時期に同校で教鞭を取り、また同様に芝区に住んでいた同年代のチェンバレンと親しくなった⁽³⁾。

チェンバレンは、長谷川のちりめん本「日本昔噺シリーズ」等を翻訳していて、ジェイムス夫人を長谷川に紹介したと考えられている。1894 年 3 月 15 日付けのチェンバレンからハーンに宛てた手紙には、結婚して 11 年後から次々に 3 人の子どもの恵まれたジェームス夫人が、最初は子ども達に向けてお話を書いたとある。一方、長女グレイスの思い出からは、チェンバレンがジェームス一家ととても親しく交際していた様子がうかがえる。ジェイムス夫妻には、長女グレイス、長男アーサー、次女エルスベスの 3 人の子どもがあり、特に長女のグレイスは幼少時からチェンバレンのお気に入り、成人後も交流が続いたようである。

ジェイムス一家は芝山内の海軍省属舎第 3 号 (現在の港区役所付近)に住み、ジェイムスが日本郵船に勤務するようになった後も山内に住んだが、グレイスが虎ノ門の女子校に通学するようになると、学校に近い麻布や赤坂付近に転居した⁽⁴⁾。

ジェイムス夫妻が来日した明治 9 年頃は西洋人はまだ少なく、人々は西洋の文明に強い興味を持っていた。グレイスの著作では、路上で若者に話しかけられたジェイムス夫人が、道ばたで英語を教え、記念に貰った英語のテキストが家にあったことが書かれている⁽⁵⁾。

ジェイムス夫人は、ちりめん本の他に長谷川が出版した文部省検定済小学校教科書『桃太郎』（学校用日本昔噺 NO. 1）（1887）を編纂し、英語の独習書『英文日本昔話独学 桃太郎』（英文日本昔噺独学第 1）（1888）を出版しているが、グレイスによれば、元々家庭教師であったジェイムス夫人は日本でも学生に英語を教えていた⁽⁶⁾。

ジェイムス夫人の教え子の川村鉄太郎はのちに家族の友人となり、ジェイムス家に滞在したり、一緒にスイスに旅行したこともあったという。川村鉄太郎の父は海軍大将川村純義で、明治天皇の信任が厚く、皇孫（のちの昭和天皇）の養育係を務めた。英国留学後に企業を経て銀行に勤務していた川村鉄太郎も退職して皇孫の御用をつとめ、父の没後は伯爵、貴族院議員となった。後年、ジェイムス夫妻の長男アーサーが日本大使館勤務となり、兄を東京に訪ねたグレイスを、川村鉄太郎は茶の湯や能で歓待した⁽⁷⁾。

グレイスの著作では、ジェイムス夫妻が正月に宮中に参内した時のエピソード⁽⁸⁾や、グレイスが幼少時に、当時、各国の公使・大使、外務大臣を務めた青木子爵の長女の遊び相手を勤めていたこと⁽⁹⁾、一家が一時期、海外赴任中の陸奥宗光の屋敷を借りて居住していたことなどが書かれており、ジェイムス夫妻の交友関係を推測することができる。

1895（明治 28）年頃、長男のアーサーが prep school に入学するために帰国し、その後一年もしないうちに一家は帰国して、夫トーマスは新設の日本郵船ロンドン支店長となった。帰国後のグレイスはオックスフォード大学セント・ヒルダズ・カレッジで英文学を学び、父が急死した 1910 年に *Joan of Arc* 次いで *Green Willow and Other Japanese Fairy Tales* を出版して作家としてデビューした⁽¹⁰⁾。グレイスの日本のお伽噺集の初版には、母ジェイムス夫人の翻訳した『松山鏡』がそのまま収録されている。

夫の死後、ジェイムス夫人はグレイスと共に Berkshire Abingdon の the Stonehill House に住み、穏やかな晩年を過ごして、1928 年 12 月 29 日に 89 歳で死去した。グレイスの残した John and Mary シリーズは、幼い時の日本の幸せな思い出を元に、甥のジョバンニと姪のマリアをモデルに書かれた児童書で、ここに登場する二人の祖母の Mrs. Hawthorne のモデルは、ジェイムス夫人だという。

ところで、東京に住んでいた時代のジェームス家には、一時、ジェイムスの弟とケイトの姉ベルも同居していた。ベルはグレイスに通っていた虎ノ門の女子校で英語を教えていたが、「フランス語とドイツ語のみならずロシア語とギリシア語を読むことができた。」とあり、ベルと同様に家庭で教育を受けたケイトも同様の語学力を持っていたことを推察できる。グレイスは、「父は仮名を少し書けたし、漢字もいくつか知っていた」「私の両親の話す日本語は、口語体で非常に正確だった。」と述べているが、ジェイムス夫人自身が日本のお伽噺などの原典を読むことは難しかったと考えられる。ジェイムス夫人の翻訳は、日本語の原典によるものではなく、各国語に翻訳されたお伽噺集などを参考にしていると考えられ、また、原作と比較し、改変された部分があるという指摘が多くなされている。

その一方で、大判の「日本昔噺シリーズ」『三つの顔』、『思い出草と忘れ草』や同 2nd シリーズ『不思議の小槌』『壊れた像』については、ジェイムズ夫人の創作ではないかとされていた。このうち、『三つの顔』については、最近になって、杢村裕子により狂言「鏡男」または古典落語の「松山鏡」の翻案であることが指摘されている⁽¹¹⁾。

また、グレイスは、著作の中で以下のように述べている。

On the left was our landlord's house. He was a benevolent-looking old gentleman with a long white beard. He could speak a little English and used to come our house to tell my mother fairy stories. She wrote them down and afterwards they were printed in little books of crepe paper with lovely pictures. I often sat quietly by, listening to Mr. Asso's long, long stories which were never too long for me.⁽¹²⁾

グレイスのこの思い出の舞台となった家は、麻布の 41 番地、著名な詩人のエドウィン・アーノルド卿（Sir Edwin Arnold 1832-1904）が住んでいた日本家屋だったと書かれている。*Japan Directory* によ

れば、一家は1893（明治26）年に「東京市麻布区今井町霊南坂41」（現在の六本木）に転居している。この住所はエドウィン・アーノルド卿の「麻布の家」として有名で、米国人画家ロバート・ブルーム（Robert Blum 1857-1903）のスケッチも残されている⁽¹³⁾。

家主の麻生武平（1835-1907）は、慶應義塾卒、初代海軍機関学校校長を務め、海軍機関大監となった人物で、著作に『日本歴史図解上世紀』がある。海軍のつながりで、ジェイムス夫妻がこの家を借りたのであろう。資料に掲載されている麻生武平の肖像画を見ると、グレイスの記憶通りの長い白髭の紳士である。グレイスのこの記憶が正しいとすれば、明治28年以降にジェイムス夫人が出版した「日本昔噺 2nd シリーズ」以降の4編は、ジェイムス夫人の創作ではなく、麻生武平からの聞き書きの可能性はある。

なお、グレイスは1957年に出版した *John and Mary's Japanese Fairy Tales* の中で、上記の思い出話を脚色したものと思われる「おじさんの家主さんの Mr. Kojo から聞いた話」として、*The Mallett*⁽¹⁴⁾を紹介しているので、少なくとも『不思議な小槌』はジェイムス夫人が麻生武平から聞いた話を書き直した可能性が高いと考えられる⁽¹⁵⁾。

3. *The flowers of Remembrance and Forgetfulness* の原典について

本稿で取り上げる *The Flowers of Remembrance and Forgetfulness* は、Japanese Fairy Tale Series No. 22 として1896（明治29）年に出版された。本文が19丁のやや大型のちりめん本である。表紙には、タイトルに続いて Told in English by Mrs. T. H. James とある。その下に Published By T. Hasegawa とあり、初版には10 Hiyoshicho Tokyo Japan の住所表示がある。初版には出版年月日の記載がないが、後の版の奥付には「明治29年6月1日 第1版発行」とあり、絵師は不明である⁽¹⁶⁾。

あらすじは以下である。

昔、老人と二人の息子がいた。息子達は父親をとっても愛していたが、ある時、父が亡くなり、息子達はとても悲しんだ。毎日、墓参をして、父が生きていた時のように日常の事などを話しかけた。しばらくして、兄は宮中に仕えよう命じられた。兄は「私は父が望んだように義務を果たそうと思う。これまでのように墓に来る事ができないので、“the lily of forgetfulness”を植えて庭師に世話をさせことにする」と弟に告げた。弟は、兄が墓に来なくなったことを悲しみ、「私は“the aster, the sacred follower of remembrance”を植え、毎日墓に詣でて、自分で世話をしよう」と言った。

何年もたったある日、墓の下から声が聞こえた。「驚くことはない。私は墓を守る精霊だ。お前は父を愛し、思い出に忠実だ。兄も父を愛していたが、忘れ草 day-lily を植えたので、父の思い出は薄れていく。お前は aster, 思い草を植えたので、父の思い出は新鮮だ。私は力のある精霊なので、お前が終生幸福に暮らせるように、お前が未来を予知できるようにしてやろう。」その後、弟は、次の日のことを夢でみて、どのようにふるまえばよいかが分かるようになり、豊に、幸せに暮らした。

この話では、day-lily を忘れ草、Aster を思い草としている。辞書をひくと、day-lily は「キスゲ（ユリ科キスゲ属（*Hemerocallis*））の植物の総称」であり、aster は、「シオン属（*Aster*）およびこれに似たキク科植物の草本の総称」で、*The Flowers of Remembrance and Forgetfulness* の表紙や挿絵も、キスゲと紫苑である。紫苑の日本の花言葉は「追憶」や「君を忘れない」で、花言葉の語源となった物語として、「今昔物語集巻第三十一第二十七 兄弟二人、菅草と紫苑とを植うる語（こと）」が知られている。兄弟が父の死を悼む筋立てからみて、*The Flowers of Remembrance and Forgetfulness* の原典である可能性が高いと考えられる。

『今昔物語集』は、平安時代後期に成立した日本最大の説話集で、第三十一は「本朝付雑事」で世俗部（雑話や奇異性のある話を集めた巻）であり、この説話集が近代文学に与えた影響は大きい。『今昔

物語集』の活字による出版では、近藤圭造による1882（明治15）年のものに「兄弟二人萱草紫苑語」が収録されている。さらに1890（明治23）年に出版された、久米幹文評 山田稲子校『今昔宇治抄』にも「兄弟二人萱草紫苑を植る事」が収録されている。

児童書の歴史でみると、門馬常次著 武井武雄画『こども今昔物語（児童図書館叢書）』イデア書院1925に「兄弟二人萱草紫苑を植る事」、木俣修著、太田大八絵『今昔物語（少年少女のための国民文学；11）』福村書店、1957に「わすれ草と紫苑」のタイトルで、子ども向けに再話されていることが判明した。

4. ちりめん本 *The Flowers of Remembrance and Forgetfulness* と原典の比較

ちりめん本 *The Flowers of Remembrance and Forgetfulness* の内容と原典であると考えられる『今昔物語集』の内容を比較するために、*The Flowers of Remembrance and Forgetfulness*（以下この節では、*Flowers* と略す）の内容を4つに区切り、1882（明治15）年出版の「兄弟二人萱草紫苑語」の文章との対照表を作成して、内容が異なる箇所を検討した。（表2参照）*Flowers* では原典にない内容を補っている箇所が多くみられるが、筋立てと登場人物には大きな違いはなく、*Flowers* の原典は『今昔物語集』世俗部第27「兄弟二人萱草紫苑語」であると考えてよいと思われる。

なお、*Flowers* と原典の主な相違点としては以下を指摘することができる。

(1) 原典では、「此の子共公けに仕へ」とあり、兄弟とも宮仕えをするが、*Flowers* では兄だけが宮仕えをしたとなっている。（*Flowers*: the elder brother was appointed to a high office in the Emperor's household.）

(2) *Flowers* では、兄はキスゲを植え、その世話をする庭師を雇うが、原典にはこの庭師を雇うというエピソードはない。

一方、『今昔物語集』の校注⁽¹⁷⁾によれば、この説話の原典である『俊頼髓脳』では、「ただにては思いなぐさむべきようもなし」、このままにしていたのでは、この悲しみをなぐさめようもないために、兄は悲しみを忘れたく思いキスゲを植えたの意。忘れ草キスゲについては、『万葉集』に大伴家持が坂上大嬢に贈った727「忘れ草わが下紐に着けたれど醜の醜草言にしありけり」や3060「忘れ草我が紐につく。時となく思ひ渡れば、生けるともなし」、3062「忘れ草垣もしみみに植ゑたれど醜の醜草なほ恋ひにけり」があり、キスゲは古来から、植えれば悲しみを忘れることができる「忘れ草」とであるとされていた。『俊頼髓脳』では、この歌伝承の上に立つ説話とされるが、原典の「なぐさめようもない」悲しみを忘れるために萱草を植える、という万葉歌の持つニュアンスが、*Flowers* では失われている。

(3) 原典にはない兄の気持ちの説明が記されている。

“I shall be at liberty to attend to my business and my pleasure without any further troubles of responsibility.”のように、悲しみを忘れるためというよりも、仕事の支障になる墓参の義務から逃れるため、その上、庭師には十分な支払いをしているというビジネスライクな考え方が述べられている。

(4) 原典の「鬼」を spirit と訳している。

「日本昔噺」の他のシリーズでは、鬼は“ogre”となっているが、*Flowers* では精霊や妖精を思わせる“spirit”という表現を用いている。

(5) *Flowers* では、最後を「孝行な弟は、裕福に幸せになりました」としているが、原典では「然れハ喜き事有らむ人ハ紫苑を殖て常に可見し憂へ有らむ人は萱草を殖て常に可見しとなむ語り傳へたとや」と終わっている。

原典では、あまりに悲しくつらいので父の死を忘れようと萱草を植えた兄を「既に其の驗を得たり」（其の思いはかなっている）としているが、ジェイムス夫人の翻案では、兄の不誠実さを強調し、孝行息子が富を得て幸せになる話としている。

なお、門馬常次の『こども今昔物語』では、原典の意をくんで、鬼は「兄さんが思ひを忘れる草を植ゑたのも、お父さんが恋しくて忘れられないからだ。」「私はどっちもふびんに思ふ」と言い、兄弟はともに幸せになる。一方、ジェイムス夫人の翻案は、原典に見られる兄の悲しみの部分を略して、聖書以来、世界中の各地に伝わる兄弟姉妹の優劣を争う昔話に近づけ、孝行な息子が幸せになる話に単純化したものと考えられる。

5. 『今昔物語集』の翻訳の歴史と *The Flowers of Remembrance and Forgetfulness*

ちりめん本 *The Flowers of Remembrance and Forgetfulness* の原典は、『今昔物語集』世俗部第 27「兄弟二人殖萱草紫苑語」と考えられるが、前述したように、ジェイムス夫人の翻訳は、日本語の原典によるものではなく、各国語に翻訳されたお伽噺集などを参考にしていると考えられている。そこで、ジェイムス夫人が『今昔物語集』の各国語訳を参考にした可能性について検討してみたい。

平安文学の翻訳については、1910（明治 43）年の Michel Revon. *Anthologie de la Littérature Japonaise: des Origines au Xxe Siècle* の中で KONNJAKOU MONOGATARI (Contes d'il y a longtemps) としてフランス語で抄訳されたのが最初とされ、この中には、「兄弟二人殖萱草紫苑語」は収録されていない。1912（大正 1）年 Kawazoe Kaichirô, Ishii Hakutei の *Konjaku monogatari Romaji bunko 1 no maki* にある Wasure-gusa to Shioni-gusa が最初であった。

したがって、ちりめん本 *The Flowers of Remembrance and Forgetfulness* が、すでに翻訳されたお伽噺集を参考にしている可能性はないと考えられる。『今昔物語集』の説話の翻訳としては、ごく初期のものと考えられるだろう。

なお、このちりめん本は、1933（昭和 8）年に Karl Florenz により *Die Blumen "Treu-Gedenke-Mein" und "Vergessenheit"* としてドイツ語に訳され、続いて 1935 年に J. Dautremier によりフランス語に訳されて *Fleurs de Souvenance et Fleurs d'Oubli* のタイトルで出版された。フランス語版は、木版の挿絵は英語版と同一で、テキストには、先に 4 で述べた英語版の (1)～(4) の特徴がすべてみられることから、ジェイムス夫人の英訳をそのままフランス語に翻訳したと考えられる。

ドイツ語版については、所蔵館の解説に「ドイツ語版はこれを翻訳したもの」⁽¹⁸⁾とあり、英語版と同様の内容であることが推察できる。

6. まとめ

1896（明治 28）年に Japanese Fairy Tale Series No. 22 として出版された *The Flowers of Remembrance and Forgetfulness* の原典は、『今昔物語集』世俗部第 27「兄弟二人殖萱草紫苑語」であると考えられる。この説話は、1912 年にローマ字により出版され、それ以前に翻訳の記録が見当たらないため、おそらくジェイムス夫人は日本人から聞いた話を書き直したものと考えられる。ジェイムス夫人の長女グレイスの記憶によれば、話し手は、当時の家主であった麻生武平であった可能性がある。

The Flowers of Remembrance and Forgetfulness では、原典の「兄弟二人殖萱草紫苑語」の内容に改編

を加え、親孝行な弟が幸せになる物語として単純化したことが明かであるが、この翻案がジェイムス夫人によるものか、あるいはジェイムス夫人に語った麻生武平によるものかは不明である。英語版の筋立ては、そのままドイツ語版、フランス語版に引き継がれた。

前述の杓村裕子の指摘に加え、今回の分析により、これまでジェイムス夫人の創作とされていた4編のうち2編には原典があることが明らかになった。また、『不思議の小槌』についてもグレイスの著作の記述から、麻生武平からの聞き書きの可能性が高いことが判明した。これらのことから、『不思議の小槌』や『壊れた像』についても原典が存在する可能性があり、今後の研究課題となる。

なお、アン・ヘリングは、その『松山鏡』の解説で、「ジェイムス夫人の評判は、どちらかというところ、有名人となったチェンバレンやハーンの知名度の陰にかくれてしまったようである。しかし、彼女の文体ほど、何度繰り返して読んでも、また朗読しても、老若いずれの年齢層にも飽きを感じさせない長谷川版英文再話は、——たとえハーンやチェンバレンの再話を含めても——決して多いとは言えない。」⁽¹⁹⁾と述べている。日本人である我々には、ジェイムス夫人の美しく分かりやすい英語の魅力を十分に理解することはできないが、「日本昔噺シリーズ」を単なるお土産品ではなく世界的に評価された児童書とした魅力の一つが、ジェイムス夫人の文章力であったと言えよう。

さらに、ジェイムス夫人が日本の若者に英語を教えていたことを考えれば、学校で英語を学ぶ教科書として企画された「日本昔噺シリーズ」の翻訳にあたって、夫人が美しく分かりやすい英語と内容を心がけたことは容易に想像することができる。これは、ジェイムス夫人の作品について、従来からあった、母が子どもたちに語った物語という以外の側面である。

日本の古典文学がどのように理解され、海外に紹介されたのかを考える際には、作品の分析に加えて、翻訳者の人となりや文化的な背景も考慮すべき要素の一つである。ちりめん本の他の翻訳者に比べると、これまで取り上げられることの少なかったジェイムス夫人についても、今後さらに研究が必要である。

〈参考文献〉

- 「麻布の軌跡 麻布の家 1 米国人画家の来日」『ザ ASABU』港区麻布総合支所 28 号, 2014 年 6 月 26 日 p. 6。
 「麻布の軌跡 麻布の家 2 日本を愛した 2 人の英国人」『ザ ASABU』港区麻布総合支所 29 号, 2014 年 9 月 30 日 p. 6。
 アン・ヘリング『ちりめん本と草双紙』福生市教育委員会 1990。
 石澤小枝子『ちりめん本のすべて：明治の欧文挿絵本』三弥井書店 2004。
 乾安代他『日本古典文学史』双文社 1987。
 久米幹文評, 山田稲子校『今昔宇治抄』大八洲学会 1890。
 『今昔物語集 巻第 31』近藤圭造 1882。
 阪倉篤義他校注『今昔物語集本朝世俗部四』（新潮日本古典集成〈新装版〉）新潮社 2015 pp. 315-317。
 杓村裕子「Japanesiska studier och skizzer における日本昔話の紹介について：“Tre spegelbilder” とちりめん本 Three Reflections との比較を中心に」『児童学研究：聖徳大学児童学研究所紀要』（22）2020. 3 pp. 29-38。
 門馬常次著〔他〕『こども今昔物語』（児童図書館叢書）イデア書院 1925 pp. 183-188。

James, Grace. *Japan: Recollections and Impressions*. London: George Allen & Unwin, 1936.

James, Grace. *John and Mary's Aunt*. London: Frederick Muller, 1950.

James, Grace. *John and Mary's Japanese Fairy Tales*. London: Frederick Muller, 1957.

Koyama, Noboru. “Grace James (1882-1965) and Mrs T. H. (Kate) James (1845-1928): Writers of Children's Stories.” *Britain and Japan: Biographical Portraits*. Vol. IX. Ed. by Hugh Cortazzi. Folkestone, Kent: Renaissance Books, 2015. pp. 472-480.

Michel Revon. *Anthologie de la Littérature Japonaise: des Origines au Xxe Siècle*. Delagrave, 1910.

注

- (1) Koizumi, Kazuo, comp., *Letters from Basil Hall Chamberlain to Lafcadio Hearn*, Tokyo, 北星堂書店, 1992. p. 84.
- (2) Koyama, Noboru. "Grace James (1882-1965) and Mrs T.H. (Kate) James (1845-1928): Writers of Children's Stories." *Britain and Japan: Biographical Portraits*. Vol. IX. Ed. by Hugh Cortazzi. Folkestone, Kent: Renaissance Books, 2015. p. 474.
- (3) James, Grace, *John and Mary's Aunt*, London, Frederick Muller, 1950. p. 11.
- (4) *Japan Directory* 1881 から 1895 の T. H. James の住所表示による。
- (5) James, Grace. *Japan: Recollections and Impressions*. London: Gorge Allen & Unwin, 1936. pp. 19-20.
- (6) Ibid., p. 257
- (7) Ibid., pp. 194-215
- (8) Ibid., pp. 14-16
- (9) James, Grace, *John and Mary's Aunt*, London, Frederick Muller, 1950. p. 54-57.
- (10) Koyama 前掲書 pp. 472-480.
- (11) 裕村裕子「Japanesiska studier och skizzer における日本昔話の紹介について: "Tre spegelbilder" とちりめん本 Three Reflections との比較を中心に」『児童学研究: 聖徳大学児童学研究所紀要』(22) 2020. 3 pp. 29-38.
- (12) James, Grace. *John and Mary's Aunt*. London: Frederick Muller, 1950. pp. 260-261.
- (13) 「麻布の軌跡 麻布の家 1 米国人画家の来日」『ザ ASABU』港区麻布総合支所 28 号, 2014 年 6 月 26 日 p. 6。
「麻布の軌跡 麻布の家 2 日本を愛した 2 人の英国人」『ザ ASABU』港区麻布総合支所 29 号, 2014 年 9 月 30 日 p. 6。
- (14) ジェイムス夫人の *Japanese Fairy Tales*. Second Series No. 2 の *The Wonderful Mallet* と同じ内容の話である。
- (15) James, Grace. *John and Mary's Japanese Fairy Tales*. London: Frederick Muller, 1957.
- (16) 石澤小枝子『ちりめん本のすべて: 明治の欧文挿絵本』三弥井書店 2004 p. 62 には「絵師が新井芳宗」とあるが、管見の限りでは確認できなかった。
- (17) 阪倉篤義他校注『今昔物語集本朝世俗部四』(新潮日本古典集成(新装版)) 新潮社 2015 p. 315。
- (18) 「文明開化期のちりめん本と浮世絵: 学校法人京都外国語大学創立 60 周年記念稀観書展示会: 展示目録」
https://www.kufs.ac.jp/toshokan/chirimenbon/b_24.html (2022 年 6 月 6 日参照)
- (19) アン・ヘリング『ちりめん本と草双紙』福生市教育委員会 1990 p. 31。

別紙

表 2. *The Flowers of Remembrance and Forgetfulness* と原典の対比表

<i>The Flowers of Remembrance and Forgetfulness</i>	『今昔物語集』 1882（明治 15）年 こと 兄弟二人植萱草紫苑語第二十七
THERE once lived an old man who had two sons. They were both dutiful and obedient, and it was impossible to tell which of them loved him best. When the old man died both sons mourned and lamented. They buried him with tears and bitter sorrow, and continually wept over his grave. Even after their first sorrow was over, they continued to visit the tomb daily, to pray there, and to relate all the circumstances and events of their lives, just as if their father were still with them. Thus they continued to mourn for more than a year.	今は昔、□□國□□郡に住む人有けり男子二人有けるが其の父失にければ其の二人の子共戀ひ悲ふ事年を経れとも忘る事無かりけり昔は失ぬる人をは墓に納めければ此をも納めて子共祖の戀しき時には打具して彼の墓に行て涙を流して我が身に有る憂へをも歎をも生たる祖などに向て云はむ様に云つゝそ返ける
At the end of that time the elder brother was appointed to a high office in the Emperor's household. He was obliged to be in attendance during the greater part of every day, and his mind was much taken up with new interests and amusements, so he said to his younger brother— "I have mourned for my father, neither have I forgotten him for a single day for more than a year, I would gladly continue to visit his grave, but you must see yourself that it is out of the question. My duty requires me to be at the palace a great deal, and I am sure our dear father would be the last person in the world to wish me to neglect a duty for his sake. It is really quite impossible, so I have made up my mind to plant the lily of forgetfulness in front of the tomb. I shall get fine handsome plats, and hire a gardener to look after them. The flowers shall take my place, and watch at the grave instead of me, and I shall be at liberty to attend to my business and my pleasure without any further troubles of responsibility." And so the elder brother came to the grave no more. After a while the younger, being grieved, said to his brother, "Do you never come to our father's grave now?" Then the elder answered testily, "Did I not tell you some time ago that it was quite out of the question? Besides, as I said then, I have planted the lily of forgetfulness, which I dare say the gardener attend to all right, I know I paid him enough,	而る間漸く年月積て此の子共公けに仕へ私を顧るに難堪き事共有りければ兄か思ける様我れ只にては思ひ可□□き様無し萱草と云ふ草こそ其れを見る人思をは忘るなれ然れば彼の萱草を墓の邊に植て見むと思て植てけり其の後弟常に行て例の御墓へや参り給ふと兄に問ければ兄障がちにのみ成て不具すのみ成にけり然れば弟兄を糸心疎しと思て我等二人して祖を戀つるに懸りてこそ日を暗し夜を曙しつれ兄は既に思ひ忘れぬれとも我は更に祖を戀る心不忘しと思て紫苑と云ふ草こそ其れを見る人心に思ゆる事は不忘さなれとて紫苑を墓の邊に植て常に行つゝ見ければ彌よ忘るゝ事無かりけり

any how:be that as it may, I have no time for any thing more, and, to tell you the truth, had forgotten all about it.” Then the younger said to himself that his brother had become false-hearted, and he answered him with anger and with sorrow, “We lived together loving and worshipping our dead father, but you, the elder have already forgotten him. I cannot forget him. I will therefore plant about his grave the aster, the sacred follower of remembrance and daily will I tend and water it with my own hands.” So he planted the flowers of remembrance, and went as before, every day to the burying place, and there tended and watered the plants, prayed and worshipped. Thus his love and reverence for his dead father, instead of fading away, became ever stronger day by day.	
In this way many years passed. At last, on day , when he was according to his custom, busying himself about the flowers at the grave, he heard a voice which seemed to come from under the grave-stone, and which said, “I am a spirit sent to keep guard over your father's bones. But do not be afraid of me, I shall guard and protect you also.” The younger son shook with fear so that he could not answer, but stood there dumb with terror, trembling and quaking. The voice then continued, “You love your father well, and have remained faithful to his memory for long years. Your elder brother loved him too, but he planted the day-lily, the flower of forgetfulness, and soon the memory of his father became dim, and at last faded away. You planted the aster, the sacred flower of remembrance, and so kept his memory green. Although I am a powerful Spirit I am merciful, and I will show kindness to you and your household so long as your life shall last. To me belongs the gift of looking into futurity, and, to reward you for your filial love, I will show you things to come, and direct you by means of visions in the night.” The voice ceased, and the younger brother went his greatly wondering.	此様に年月を経て行きの程に墓の内に声有て云く我れは汝が祖の骸を守る鬼也汝ち怖るゝ事無かれ我れ亦汝を守らむと思ふと弟此の音を聞くに極て怖しと思ひ乍ら答へも不為て聞居たるに鬼亦云く汝ち祖を戀る事年月を送ると云へとも替る事無し兄は同く戀ひ悲て見えしかとも思ひ忘る草を殖て其れを見て既に其の驗を得たり汝ハ亦紫苑を殖て亦其れを見て其の驗を得たり然れば我れ祖を戀ふる志の懇なる事を哀ふ我れ鬼の身を得たりと云へとも慈悲有るに依て物を哀ふ心深し亦日の内の善惡の事を知れる事明か也然れば我れ汝か為に見えむ所有らむ夢を以て必ず示さむと云て其の音止ぬ弟泣く泣々喜ふ事無限し
That night he dreamed a dream, and in his dream the events of the next day were clearly revealed. And so every night in his vision it was shown to him what would happen, and in what manner he should act. In this way he was enabled to avoid all danger and	其後は日の中に可有き事を夢に見る事違ふ事無かりけり身の上の諸の善惡の事を知る事暗き事無し此れ祖を戀る心の深き故也然れハ喜き事有らむ人ハ紫苑を殖て常に可見し憂へ有らむ人は萱草を殖て常に可見しとなむ語り傳へたるとや

do wisely, so that, in the end, he became fortunate, rich and happy.	
--	--